氏　　名	アリ　アルタデイ
学　　位	博士（日本言語文化学）
学位記番号	
学位授与年月日	
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	日本語とインドネシア語の条件文の対照研究 —用法と主節のモダリティを中心に—
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　田中寛
	（副査）大東文化大学教授　押川典昭
	（副査）大東文化大学准教授　福盛貴弘
	（副査）学習院大学教授　前田直子　（外部審査）

博士論文　審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

以下、審査会での講評を含め報告する。

1．本研究の課題

本研究は日本語とインドネシア語の条件文の用法と主節のモダリティを考察したものである。レアリティーの概念とモダリティの枠組みで分析した。

1. 日本語の条件文の典型的な形式と周辺形式の用法とモダリティを明らかにする。
2. インドネシア語の条件文の用法とモダリティを明らかにする。
3. 日本語とインドネシア語の条件文の用法とモダリティの共通点と相違点を明らかにする。
4. 以上の研究をふまえ、日本語とインドネシア語の対照研究の今後の課題を探求する。

2．本論文の構成、及び要約

本研究は第 1 章序論、第 2・3・4 章では日本語とインドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティを分析した。第 5 章では両言語の条件形式の用法とモダリティの共通点と相違点について、第 6 章では研究の総括と今後の課題について論じた。以下、各章で考察した内容の要約である。

第 1 章序論では本研究の背景と目的、条件文の定義とその範囲、日本語とインドネシア語の条件文に

関する先行研究、及びその問題点と本研究の課題、研究方法と分析の枠組みを記述した。本研究テーマを選んだ理由は、これまで両言語の条件文の対照研究を取り上げ、本格的に考察した研究が皆無な点である。本研究は日本語とインドネシア語の条件文の対照研究の基礎的な研究となるものである。本研究の主要目的は同じ分析の枠組みにおいて、両言語の条件文の用法と主節のモダリティを明確にし、共通点と相違点を明らかにすることである。

日本語の条件文の典型的な形式は「ト」「タラ」「レバ」「ナラ」の４つである。この主要形式の他に「テハ」「場合」「次第」「ナイコトニハ」「限り」「テミロ」などの周辺形式も存在する。一方、インドネシア語の条件文形式は kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)の４形式である。

日本語の条件形式の用法やモダリティに関する先行研究は多く存在するが、反事実条件文の問題や条件文の周辺形式のモダリティに関しては明らかにされていない部分がある。これに対し、インドネシア語の条件形式の研究は未開の領域であり、よって日本語とインドネシア語の条件形式の用法とモダリティを分析することは両言語の研究にとっても大きな意義がある。

本研究では書き言葉の用例を中心に分析を行った。日本語の例文は、「聞蔵 II ビジュアル」の『朝日新聞』・『アエラ』・『週刊朝日』から収集した。用例総数は主要形式と周辺形式を合わせ 16192 例を数える。一方、インドネシア語の例文は新聞記事、及びインドネシア語に翻訳された日本の小説から収集した。用例総数は主 1623 例を数える。分析の枠組みとしては前田（2009）によるレアリティー概念と日本語記述文法研究会編（2003）による４つのモダリティの種類を採用した。

第 2 章では日本語の主要条件形式の「ト」「タラ」「レバ」「ナラ」の用法と主節のモダリティを分析した。その結果は次の通りである。

(1) 仮定条件文に関しては、４形式ではいずれも典型的な仮定条件文、既定条件文、反事実条件文のパターンが成立するが、他のパターンについては、「ト」形式を除き用いられない場合が多い。(2) 恒常条件文に関しては、４形式ではいずれも一般条件文と習慣を表す条件文を用いることが可能である。(3) 事実条件文に関しては、「ナラ」形式を除く「ト」・「タラ」・「レバ」の形式では事実条件文が用いられる。

一方、主節のモダリティに関して明らかになった点は以下の通りである。

(1) 仮定条件文に関しては、反事実条件文を除く典型的な仮定条件文と既定条件文のモダリティには大きな違いはない。４形式の主節では情報系・評価と認識・説明・伝達のモダリティが用いられる。先行研究によれば「ト」形式では行為系モダリティが用いられないとするが、本研究で調査した結果、行為系の意志と依頼モダリティの出現頻度は低い。(2) 恒常条件文に関しては、4 形式の主節では叙述モダリティと説明モダリティが用いられる。(3) 事実条件文に関しては、「ト」・「タラ」・「レバ」形式では叙述モダリティのみが用いられることを明らかにした。

第 3 章では条件文の周辺形式として「テハ」・「場合」・「限り」・「次第」・「ナイコトニハ」・「テミロ」の用法と主節のモダリティを分析した。周辺形式の用法については以下の通りである。

(1) 仮定条件文に関しては、６つの形式では典型的な仮定条件文が用いられる。「次第」と「テミロ」形式を除く「テハ」・「場合」・「ナイコトニハ」・「限り」形式では、既定条件文と反事実条件文を用いることが可能である。また、いずれも仮定条件文の「避けられない－未実現」と「最低条件－未実現」及び、反事実条件文の「事実－反事実」パターンは用いられない。(2) 恒常条件文に関しては、「テミロ」形式を除く 5 つの形式では一般条件文と習慣を表す条件文が用いられるが、いずれも恒常条件文の自然現象を表す条件文は用いられにくい。(3) 事実条件文に関しては、６つの形式では基本的に用いられにくいが、「テハ」と「限り」形式では〈発見〉、「次第」形式では〈同一主体に関わる連続動作〉に用いられる。

周辺形式のモダリティに関して明らかになった点は以下の通りである。

(1) 仮定条件文に関しては、６つ全ての形式で情報系のモダリティが用いられる。「テミロ」形式を除く５つの形式の仮定条件文の主節では、評価と認識、説明、伝達態度のモダリティが用いられる。しかし、「テハ」と「ナイコトニハ」形式では意志・勧誘・行為要求が用いられにくいか、もしくは用いられない。(2) 恒常条件文に関しては、5 つの周辺形式の主節では叙述と説明モダリティが用いられる。(3) 事実条件文に関しては、「テハ」・「次第」・「限り」形式の主節では叙述モダリティが用いられる。

第 4 章ではインドネシア語の条件形式 kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)の用法と主節のモダリティを分析した。インドネシア語の条件形式の用法に関して、以下の点が明らかにされた。

(1) 仮定条件文に関しては、asal(kan)形式を除く kalau・jika・(apa)bila 形式では全ての仮定条件文のパターンが用いられる。しかし、前件が最低条件を表す場合、asal(kan)形式が最も適切である。(2) 恒常条件文に関しては、asal(kan)形式を除く kalau・jika・ (apa)bila 形式は恒常条件文の一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。(3) 事実条件文に関しては４つの形式はいずれも用いられない。

一方、インドネシア語の条件形式のモダリティに関して明らかになった点は以下の通りである。

(1) 仮定条件文に関しては、asal(kan)形式を除く kalau・jika・(apa)bila 形式でモダリティの制約がほとんど見られない。(2) 恒常条件文に関しては、インドネシア語の条件形式では叙述モダリティと説明

モダリティが用いられる。
第5章では日本語とインドネシア語の条件文の用法とモダリティの共通点と相違点について論じた。
日本語条件文の典型的形式と周辺形式の共通点と相違点に関しては以下の 2 点を明らかにした。前半部分の 5.1 は典型的な4形式と周辺的6形式を比較した。その要約は以下の通りである。
(1) 用法に関する共通点と相違点：共通点は、日本語の典型的な形式も周辺形式も典型的な仮定条件文が用いられることである。相違点は、典型的な形式の「ト」と「タラ」は事実条件文が用いられる。一方、他の形式は用いられにくいか、または用いられない。
(2) モダリティに関する共通点と相違点は、「ト」や一部周辺形式を除いて、全てのモダリティを用いることが可能である。「ト」・「テハ」・「ナイコトニハ」形式は行為系モダリティが用いられにくいか、または用いられない。
後半部分 5.2 の日本語の条件文とインドネシア語の条件文の共通点と相違点に関しては次の 2 点を明らかにした。ただし、インドネシア語では主要形式のみ対象とした。
(1)共通点は、日本語もインドネシア語も仮定条件文と恒常条件文が用いられる。相違点は、事実条件文は日本語の「ト」と「タラ」形式が用いられるが、インドネシア語の条件形式は用いられない。
(2) モダリティに関する共通点は、仮定条件文のモダリティに関しては、日本語の条件形式とインドネシア語の条件形式では、情報系・評価と認識・説明・伝達のモダリティを用いることが可能である。相違点は日本語の条件形式は行為系の意志・勧誘・行為要求モダリティの用法に制約がみられる。一方、asal(kan)形式を除くインドネシア語ではその制約がほとんど見られない。
第6章では本研究の結論と今後の研究課題を説明した。
(1) 使用範囲に関して日本語の「タラ」形式が最も広く、「テミロ」形式は最も狭い。インドネシア語の条件形式では kalau 形式が最も広く、asal(kan)形式は最も狭く、制約が大きい。
(2) 置き換えの可能性に関して、日本語の条件文の典型的な条件形式と周辺形式では、典型的な仮定条件文の場合、各形式は互いに置き換えが可能である。事実条件文に関しては、「ト」と「タラ」は相互に置き換えられるが、他の形式に置き換えられにくい。インドネシア語では、asal(kan)形式を除く、kalau・jika・(apa)bila　形式間で置き換えが比較的可能である。
(3) 訳出の傾向に関して、一般に仮定条件文と恒常条件文の場合、日本語の条件形式はインドネシア語の kalau・jika・(apa)bila に訳すことが可能であるが、事実条件文の場合、kalau、jika、(apa) bila に訳すことはできない。一方、日本語の最低条件を表す仮定条件文の場合、インドネシア語の asal(kan)に訳すのが最も適切である。本研究では日本語から見たインドネシア語の対応関係を見たが、インドネシア語から日本語に翻訳した作品についての検討は今後の課題である。

3．本研究の成果
本研究は大量のデータベースと自ら収集した用例を丹念に集計分析して実証研究をすすめたもので、これによって、明らかにされた主要な研究成果は次の3点である。
(1). 用法に関しては、「テミロ」形式を除く日本語の条件形式は仮定条件文と恒常条件文が用いられる。一方、事実条件文は基本的に「ト」形式と「タラ」形式が用いられる。モダリティに関しては、仮定条件文の場合、行為系の意志・勧誘・行為要求モダリティを用いる形式に限られている。
(2). 用法に関しては、インドネシア語の 4 つの条件形式では仮定条件文と恒常条件文が用いられる。モダリティに関しては、asal(kan)形式を除くほとんどのケースで制約がない。
(3). 日本とインドネシア語の条件形式の共通点と相違点は、用法に関して日本語もインドネシア語も同じく仮定条件文と恒常条件文が用いられる。一方、日本語は事実条件文が用いられるが、インドネシア語は用いられない。モダリティに関して仮定条件文のモダリティの場合、日本語の条件形式は行為系の意志・勧誘・行為要求モダリティの用法に制約が見られる。一方、インドネシア語では asal(kan)形式を除けば、その制約がほとんどないという結果が得られた。

4．講評および審査委員の意見（要約）
アリ　アルタデイ氏は修士論文において、早くから日本語の条件表現を対象に研究をすすめてきた。本研究はほぼ8年にわたる研究の成果である。本研究は日本語の条件形式を三つの枠組みでとらえ直し主節における主観性、モダリティの分布を明らかにしたことは日本語教育においてもきわめて重要な貢献をなしている。また、インドネシア語の条件形式ではこれまで詳細な先行研究がないなかで、独自に方法論を模索、構築し、日本語との対照比較により、一定の成果を示したことは、インドネシアにおける日本語学の進展、日イ対照研究においても大きく貢献しうるものである。
審査会では言語学全般の立場から、福盛貴弘准教授の意見が述べられ、説明言語の精確性について数点

の指摘があった。また、数値の信憑性、背景の分析について論述の不十分な点が指摘された。条件文研究の専門家である前田直子教授からは、力作であるとの好評を得つつも、各用法のモダリティ使用の弁別及び背景については、なお多角的な調査分析が必要とされるとの指摘があった。インドネシア語との対照研究ではインドネシア語研究の専門家である押川典昭教授から、論文中にインドネシア語の訳例が一部不適切な点、また収集した用例が対訳の小説類が大半で、論説文や社会科学関係の文脈での使用実態が明らかにされていない点、対照比較にあたっては文脈を重視し、直訳にもとづく比較によって誤解を生じやすい点等が指摘された。主査の意見としては、前半部分では種々の統計分析を行った労を多としながらも、適切性の判定にはなお十分な調査と考察が求められること、また、条件表現を構成する仮定条件文、恒常条件文、事実条件文という大きな三つの枠組みにおいて、モダリティ要素の出現数値、背景究明にさらなる工夫が求められる点などが指摘された。論文末尾には有田節子目録（『日本語の条件表現』所収）をふまえ、1993 年以降に発表された条件文研究の詳細なる文献目録が収録されており、今後の複文研究、条件文研究に大きく資するものである。

本研究で残された課題は日本語の周辺形式の反事実条件文についての更なる研究である。日本語の条件文の典型的な形式における変異形の意味や用法などの問題、条件形式の否定形の問題、またインドネシア語の他の条件形式や、時間関係を表す接続語の用法やモダリティ、及びそれらの比較・対照についても今後の課題であるが、これは今後の研究、研鑽によって大いに期待されてよい。

アリ　アルタデイ氏は来日以来、各種の外部の研究会、研修会、学会に参加し、積極的に日本語学の成果を吸収すべく努めてきた本人の学術研究の真摯な姿勢は大いに評価される。論文作成にあたっても多くの日本人研究者に内容の点検、表記についてご示教を得るなどの努力を重ねた。指導主査にあたった印象では、一貫して指示詞の研究に日々研鑽を積んできた氏の学術研究姿勢は高く評価されるものである。日本語学全般のみならず日本言語文化学のさまざまな領域にわたる教養知識についても博士学位授与に十分ふさわしい背景、人徳を涵養していると判断される。

審査委員の意見に述べられたような論述の方法、とくに前半部分の日本語の条件表現形式と後半部分の対照研究との構成のありかた、個々の事象分析にあたっての用例の提示、記述の仕方において、なお工夫を要する箇所が散見されるものの、今後の研究の進展によって少なからず克服されるべきものであり、総体的に見た場合、本研究の成果を大きく損なうものではないことを附記する。

５．結論

審査会終了後、指摘された諸点について慎重に審議を重ねた。その結果、以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以　上

口述審査実施日：2014年1月30日、午前10時半から12時半まで。於、大東文化会館

履歴及び学術業績（参考論文目録を含む）

（2013年10月提出時現在）

年　号	年 月	学歴・職歴・研究歴・賞罰（項目別にまとめて記入）
		学歴
1995 年	9 月	インドネシア・ダルマプルサダ大学文学部日本文学科入学
1999 年	9 月	インドネシア・ダルマプルサダ大学文学部日本文学科卒業
2000 年	9 月	国立インドネシア大学大学院日本地域研究科博士前期課程入学
2003 年	6 月	国立インドネシア大学大学院日本地域研究科博士前期課程修了
2006 年	4 月	拓殖大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻博士前期課程入学
2008 年	3 月	拓殖大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻博士前期課程修了
2010 年	4 月～3 月	大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻博士課程後期課程　研究生
2011 年	4 月	大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻博士課程後期課程入学
2013 年	10 月	大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻博士課程後期課程　在籍中
		職歴
2000 年	1 月～現在	インドネシア・ダルマプルサダ大学文学部日本文学科専任講師
		研究歴（＊は査読有の論文・◎は外部学術誌査読有の論文）
2011 年	2 月	＊「日本語の条件文の分類からみたインドネシア語の条件文の用法について」『語学教育研究論叢』第 28 号：pp.345－366　大東文化大学語学教育研究所 2011 年 2 月
2011 年	3 月	「日本語の条件文の分類と用法について－「と」と「たら」の分類と用法を中心に－」『外国語学会誌』第 40 号：pp.251－266　大東文化大学外国語学会 2011 年 3 月
2011 年	3 月	＊「日本語の「ナラ」条件文の分類と用法についての一考察」『外国語学研究』第 12 号：pp.157－168　大東文化大学大学院外国語学研究科 2011 年 3 月
2011 年	3 月	「日本語の「タラ」条件文の分類と用法についての一考察」『指向』第 8 号：pp.59－71　大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻 2011 年 3 月
2012 年	3 月	「日本語の条件文とその問題点について」『外国語学会誌』第 41 号：pp.231－250 大東文化大学外国語学会 2012 年 3 月
2012 年	3 月	＊「日本語の「ト」条件文の用法と主節のモダリティについて」『外国語学研究』第 13 号：pp.199－210　大東文化大学大学院外国語学研究科 2012 年 3 月
2012 年	3 月	「現場指示と文脈指示からみたインドネシア語指示詞の ini と itu の用法に関する一考察」『指向』第 9 号：pp.120－134　大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻 2012 年 3 月
2013 年	3 月	「条件文の周辺の「限り」形式の用法と主節のモダリティについて」『指向』第 10 号：pp.100－113　大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻 2013 年 3 月
2013 年	3 月	◎「条件文の周辺形式「次第」の用法と主節のモダリティについて」『JURNAL NIHONGO ジャーナル日本語』Vol.5 No.1：pp.25－37　インドネシア日本語教育学会 2013 年 3 月
2013 年	3 月	＊「現場指示と文脈指示からみたインドネシア語指示詞の ini・itu と sini・situ・sana の用法について」『外国語学研究』第 14 号：pp.169－178　大東文化大学大学院外国語学研究科 2013 年 3 月
2013 年	3 月	「現場指示と文脈指示からみたインドネシア語指示詞の用法について」『語学教育フォーラム』第 28 号：pp.85－144 大東文化大学語学教育研究所 2013 年 3 月

2014年	3月	◎「条件文の周辺形式「テハ」の用法と主節のモダリティについて」『JURNAL NIHONGO ジャーナル日本語』Vol.5 No.2 インドネシア日本語教育学会 2014年3月（予定）
2014年	2月	＊「条件文の周辺形式「場合」の用法と主節のモダリティについて」『語学教育研究論叢』第31号大東文化大学語学教育研究所 2014年2月（予定）
2014年	3月	「条件文の周辺形式「ナイコトニハ」の用法と主節のモダリティについて」『外国語学会誌』第40号　大東文化大学外国語学会　2014年3月（予定）
		口頭発表（＊は全国学会規模）
2010年	10月	「日本語の条件文の分類からみたインドネシア語の条件文の用法について」第2回『東西文化の融合』国際シンポジウム　大東文化大学（2010年10月31日）
2011年	11月	「日本語の「ト」条件文の用法と主節のモダリティについて」第3回　『東西文化の融合』国際シンポジウム　大東文化大学（2011年11月6日）
2012年	6月	「現場指示と文脈指示からみたインドネシア語指示詞の ini・itu と sini・situ・sana の用法について」第4回『東西文化の融合』国際シンポジウム　大東文化大学（2012年6月17日）
2013年	6月	＊「レアリティ概念からみたインドネシア語の kalau・jika・bila 条件文の用法」第146回日本言語学会春季大会　茨城大学（2013年6月15日）
2013年	9月	＊「条件文の周辺形式の「～ナクテハ」と「～ナイコトニハ」をめぐって－用法と主節のモダリティを中心に－」第5回研究大会　日本語/日本語教育研究会　学習院女子大学（2013年9月29日）
2013年	11月	＊「インドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティについて」第44回日本インドネシア学会大会　摂南大学（2013年11月10日）
		賞 罰
		なし

以上